

# 太宰府の文化財

(271)

## 三浦潮井碑 明治13年 宰府5丁目

かつて俗に「三浦の碑」と言われるものが、天満宮の表参道にあたる御笠川沿いの五条橋東側と、粕屋・宇美方面からの裏参道となる三浦橋あたりに建てられていました。三浦というのは紀伊の和歌浦、伊勢の二見ヶ浦、筑前の箱崎浦のことで、その「御潮井」を持ってきて川の水を清め、太宰府に参詣に訪れる人々が身を清めるようにしていたようです。どちらの碑も洪水で流され、五条橋の碑は河川改修で発見され、しばらく天満宮にあずけられていた後、今の五条橋の袂に建てられました。文政13(1830)年のもので仙厓和尚の筆です。三浦橋あたりにあった碑は行方知れ

ずになっていたので、平成15(2003)年の豪雨災害の復旧工事のときに、双葉老人ホームの前にある高砂橋の上流で発見されました。

碑文から明治13(1880)年に北谷村・齋藤孫次さんと大石村(現筑紫野市)・市川伊作さんが寄付したことがわかります。五条橋の碑は江戸時代のもので、三浦橋あたりの碑もきつと同時代のものがあつたと思われ、それが洪水で行方不明なり、明治13年に新



たに建てられていたのだと想像されます。この付近が三浦の潮井をもって清められた大事な場所であつたことが人から人へ伝わっていたことが感じられます。

現在は発見された高砂橋の下流側の東に建てられています。

文化財課  
城戸 康利



|    |                            |                   |
|----|----------------------------|-------------------|
| 正面 | 三浦潮井                       | 和歌浦<br>二見浦<br>箱崎浦 |
| 背面 | 明治十三年<br>庚辰八月日             |                   |
| 側面 | 北谷村<br>齋藤孫次<br>大石村<br>市川伊作 | 寄附                |

三浦の碑、碑文

# 太宰府の文化財

272

## 太宰府神社見取図

明治二十七年（1894）年

年間540万人の観光客を迎え入れてきた太宰府。ここ2年間は九州国立博物館の開館によって昨年度で730万人近くの人々が、太宰府を訪れてくださっています。なかでも正月の天満宮は、全国的なニュースになるほどの賑わ



写真提供：太宰府天満宮文化研究所

いを見せます。

今回紹介する一枚の絵図は太宰府天満宮の有様を伝えるもの一つで、明治27（1894）年に描かれたとされる絵図です。『太宰府神社』とは、明治4（1871）年に改称された太宰府天満宮のことで、同15（1882）年に官幣小社に列せられています。

この絵図は、明治元（1868）年に施行された廃仏毀釈後の天満宮の状況を知る上で貴重な資料になります。この絵図自体は、太宰府天満宮を主体として描かれていることから、参道近傍や周辺にあった家屋の状態が、「霞」によって曇かされており明らかにできませんでした。最近、この時期の参道の有様を知る上で貴重な写真が、佐賀県基山町で見つかりました。この写真は、個人で所蔵されていたもので、参道最奥部、延寿王院を写したものです。撮影時期は、明らかではありませんが、現在参道最奥部にある

明治28（1895）年に建て

られた石造鳥居が無いことや、境内地を画する施設の有様から、先に紹介した『太宰府神社見取図』が描かれた明治27年頃に近い時期であると考えられます。人が写し込まれていないためか、一種「ゴーストタウン」的な印象を醸し出

ています。当時の写真技術から、動くものが写らなかつたと考えられます。「日の丸」が店頭に掲げられていることをみると、何か記念となる日に撮影されていることは想像できません。明治中頃の参道は、江戸期に上三町と呼称された三条・連歌屋・馬場のいわば社家町が解体し、土産物屋や飲食店などが軒を並べ、次第



写真提供：基山町教育委員会

に町屋化していったとされます。絵図や写真からも、社家町というよりは、町屋の風景、いわば現在の参道の景観と一致することが読み取れます。身近に眠る太宰府に関わる資料、まだまだ掘り起こしができそうです。

文化財課 中島恒次郎



# 太宰府の文化財

273

## 白玉帯 丸鞆く平安時代

古代には位階制度がありました。神社などで見られる「正一位」「従五位下」などは、その名残です。

位を与えられた人物が公の場に出る際には、自らの位に見合った服・装身を整える必要がありました。それは腰帯についても同様でした。

奈良時代中期に施行された養老衣服令の朝服（日常の勤務服）の規定には、腰帯は、五位以上（いわゆる貴族層）は「金銀装腰帯」（金銀で飾



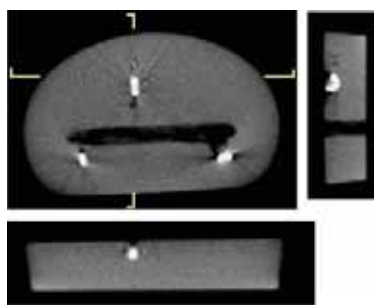
白玉帯丸鞆（表）



白玉帯丸鞆（裏）

つた腰帯）、それ以下は「烏油腰帯」（黒い腰帯）とされています。

平安時代はじめ、延暦年間（795-796年頃）になると、石製の飾具を用いた「石帯」を広く通用することがはじまります。また同じ頃、公卿（三位以上及び四位の参議）には「白玉帯」着用が許され、一般貴族との違いが明示されるようになりました。



白く光っているのが銀線  
X線写真（九州国立博物館撮影）

の発掘調査で出土しました。これは「丸鞆」と呼ばれる帯飾具ですが、最大の特徴は、半透明で混じりのない純白色の石が用いられていることです。これが「白玉」なのか、単なる「白い石」かが焦点でした。

そこで、これを文化ふれあい館の機器で分析したうえで、九州国立博物館・福岡市埋蔵文化財センターでも確認したところ、帯に装着するための糸かがり穴には、全てに直径わずか0.5mm以下の銀線が残っていることがわかりました。先述のように金銀使用が認められた腰帯は貴族の腰帯であり、「延喜内匠寮式」に記さ

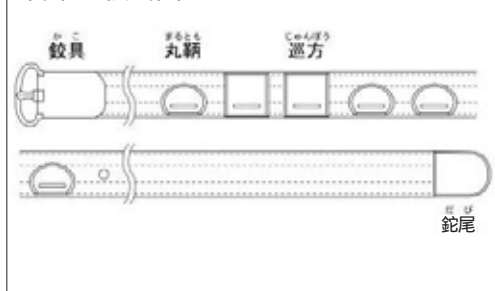
れる「馬瑠御腰帯」も、瑪瑠と帯との装着に銀線が使用されたことが記されています。さらに、石材は古代で「玉」とされた水晶や瑪瑠と同じ石英質であり、しかも純白色であるため、「白玉帯」の玉石と断定したのです。これは、銀線がかかるうじて残っていたことと、破壊せずに科学分析できたことによる大きな成果でした。

さて、これが白玉帯とわかったところで、もう一つ重要なことがあります。古代では「官位相当」といって、位階にに応じた官職に任せられた（官位制）。そこで、白玉帯を着用できた三位以上か四位の参議について見てみると、

大宰府官人では、帥・権帥といった長官クラスの人物が該当します。

平安時代の史料をひもとくと、長官である「帥」には親王が任官されましたが大宰府には下向せず、実際には、帥の代理としての「権

### 石帯の模式図



帥」または次官の「大式」のいずれかが赴任していました。それでも、大宰府の「官長」ということで、「大式」であってもその多くが参議を兼任しており、白玉帯着用可能な位階を有していたのです。つまり大宰府管内の白玉帯着用者は、唯一大宰府の「官長」のみであり、これは、彼らの遺物といえることができます。

この丸鞆は、日本古代の宝飾・服飾を考える上でも、また古代大宰府を知る上でも、貴重な発見となりました。

# 太宰府の文化財

274

## 鶴の墓(鶴の碑)

朱雀三丁目

西鉄二日市駅から博多方面に線路沿いに進むと、しばらくして菅原道真の蟄居した南館跡として著名な榎社がありますが、その榎社前の踏切の傍らには無銘の自然石が佇んでいます。無銘のうえ、説明板もないため、この石に関してご存じの人は、少ないかもしれませんが、この石には次のような昔話が伝えられています。

昔、飛驒(現在の岐阜県)の匠が木材を彫刻して、人が乗れるほど大きな鶴の彫刻を作りました。そのまま飛び立つような見事な出来だったため、匠は自分で乗って飛んでみたいと思いましたが、冗談で鶴の背に乗ってみると、不思議なことに鶴はまるで生きてるように、羽を広げて飛び立ちました。匠を乗せた鶴は

西へ西へと進み、ついには、唐土(現在の中国)まで到着してしまいました。そこまではよかつたのですが、唐土から日本に向けて帰ろうとした匠たちに向かって、その異彩を怪しんだ唐土の人により、矢を射られました。その矢によって鶴の片羽は壊されてしまいました。片羽になった鶴を匠は励ましながら、日本まで帰ってきました。ちょうど、太宰府あたりまで帰ってきた所で、鶴は力尽きて落ちてしまいました。匠は、鶴を愛おしんで墓を作り、手厚く葬って故郷の飛驒へ帰っていききました。

この鶴の片羽が、最後に折れて落ちた海辺の津を、「片羽の津」といい、やがて転訛して、「羽片の津」となり、「博多の津」となったといわれています。

また違うお話として、鶴を作ったのは飛驒の匠ではなく、博多の大工の名人が木で鶴をつくったという話もあります。その際に不時着した場所は、通古賀の「鶴の屋敷」、「鶴野屋敷」、現在の小字鶴畑あたりだという話も伝えられています。

寛政2(1790)年に、船賀和尚によって記された「王城神社縁起」によると、「塩井敷」此辺を

つると云、昔、飛驒内匠、唐土に工三稽古二行し時、唐土より返さざりけれハ、木にて鶴を作り乗て帰りし、其鶴埋ミし所なりト云。」とあるのがこのお話が記録されている最古の例です。

この昔話は、まんが日本昔ばなしでも取り上げられていますので、お話の内容自体はご存じの人もいるかもしれませんが、実はこの昔話の舞台が太宰府だったということが、案外知られていないエピソードでしょう。



ちなみに昔話に登場した飛驒の匠とは、奈良時代に高い木工技術を持つ飛驒の技術者を、税金の代わりに造宮省や木工寮に従事する匠丁として従事させるために、飛驒の国から都へと送られた人のことをいいます。この人たちの木工技術力で都の造宮や仏像が作られていきました。その後、時代が下って中世になると全国にその技術力を請われて匠は行脚しています。その証拠として、各地に飛驒の匠作と伝えられる作品が残っています。

す。もしかすると、博多や太宰府にやってきた飛驒の匠のお話、形を変えて昔話として現代まで伝わっているのかもしれない。

文化財課 高橋 学





# 太宰府の文化財

275

## 水城東門跡と礎石

### く国分2丁目

水城は664年に築造され、土塁で、この国分側の丘陵と住宅街になっている吉松丘陵との間1.2kmを塞ぐように造られています。土塁には門が2カ所造られ、吉松丘陵裾に



西門、国分丘陵裾に東門が造られました。

県道福岡日田線が水城跡と交差する付近には、水城の東門があったと考えられています。

平安時代中期の歌人藤原高遠が詠んだ和歌には、岩垣の水城のせきに群むかふうちのごころもしらぬ諸人（夫木集）とあり、石垣を伴った城門であったことが想像されます。古来から太宰府の入口として交通の要

衝であったことから、城門に関する遺構は壊されてしまい、ほとんど残されておらず、東門のものと考えられる礎石が残っているだけです。

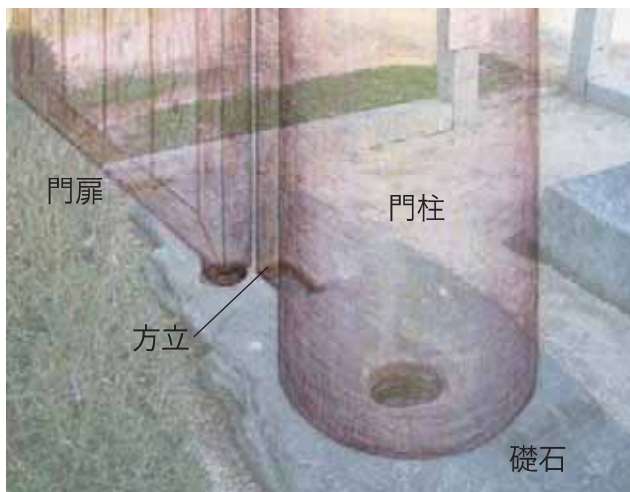
礎石は、240×80cmの長方形で、礎石上面には径19cmと15cmの円形彫り込みが2個と25cm×11cmの方形彫り込みがあり、図のように門柱を据え、もうひとつは門扉開閉の際の軸受けの役目を果たします。方形の穴は扉と門柱との隙間を塞ぐ方立を据えます。

旧街道付近に東門があったと考えられていることや、礎石の彫り込み穴の位置関係から、礎石は建築当時の位置ではないことがわかります。発掘調査でも江戸時代末頃の攪乱

層の上に礎石がのっていることがわかりました。江戸時代から『筑前国続風土記』などの地誌にこの礎石のことが記され、『筑前名所図会』には挿図とともに「東の方大路の傍に、門の礎一つ残れり、是を俗に鬼の礎石といふ」と記されており、江戸時代には鬼の礎石ともいわれていたようです。

東門周辺は、最近広場や説明板が整備され（4ページ参照）、より見やすい水城跡になっています。暖かくなるこの季節、足を運んでみてはいかがでしょうか。

文化財課 宮崎 亮一



礎石と門の構造復元図



# 太宰府の文化財

276

## 宝満山遺跡34次の調査

奈良〜平安時代



▲現地説明会の風景

調査によってその一部が発見されてきました。

現況は山林で、当時はボーリングステッキなどを使い礎石の存在が知られ、その形状から天台宗を開いた最澄により国内6カ所に置かれた「六所宝塔院」のうちの「安西塔」ではないかとされている遺跡です。3月22日におこなった現地説明会では約100名の参加者があり、関心を集めたホットな話題の遺跡です。

調査では三間四方の礎石の配置が想定され、柱間は240cm+300cm+240cmの一辺780cmの三間四方の規模となります。

礎石建物は地山を削りだし、整形した25m四方ほどの壇のような高まりに乗るような状況で、この高まりの裾には2ないし3段の土留めのような石列があり、建物南側正面

と東西の斜面に石の階段が作りつけられていました。

出土遺物には軒に使われた物を含む瓦、大宰府周辺で作られた土師器、須恵器と呼ばれる土器、中国からの初期の輸入陶磁器である越州窯青磁の椀、金銅製の小型仏像などが見られます。土器および瓦の使われた年代は9世紀から10世紀の平安時代前半頃ものが大半を占め、土器には一部8世紀(奈良時代)と11世紀後半頃(平安時代後期)のものが見られます。瓦は軒に面す部分の模様などから9世紀から10世紀の年代が想定されている様式のもので、結果的にこれらを総合的に見ると、今回再発見された礎石建物はこの時期のものと考えられます。

小金銅仏は北側礎石列の間の表土層で瓦や鉄釘などとともに出土しています。右手を上げ、左手を下げる印を結ぶもので、腐食のため詳細な像様は指摘できませんが菩薩ないし如来の立像といえます。高さ12cm、幅3.5cm、奥行き3cmを測ります。出土した小金銅



仏としては宝満山では3例目となります。

今回の調査には地元の民間の団体である「宝満山研究会」の方々も協同で作業をさせてもらいました。地権者の方のご承諾を受けて、会員の方とは事前の下草刈、雑木の間引き作業をおこないました。伐採作業にかかるまえにメンバーの一人である元高校生物の先生より、宝満山の自然環境を考慮して伐って良い木、伐らない木のご説明をいただき、慎重に作業を進めました。遺跡のある場所は、もとは赤松が点々と自生する2次林でしたが、ここ20年で落葉広葉樹や常緑広葉樹がはびこり、赤松はことごとく根腐れして倒

壊しかかっていました。それだけ環境の変化が著しいことを示しています。

「遺跡のためにはもとの管理された赤松林の里山に戻そう！」とのご提案も会員の方からありました。遺跡の保護活動から宝満山全体の自然保護へと思いが広がっています。

### 参考文献

- 小田富士雄編「宝満山の地宝」
- 1982年太宰府顕彰会
- 「太宰府市史考古資料編」
- 1992年太宰府市

文化財課 山村 信榮



# 太宰府の文化財

277

## 大野城跡大石垣

大字坂本字口上谷

〔古代〕



平成15年7月19日に太宰府各所で大きな災害をもたらした豪雨は記憶に新しいところですが、四王寺山にも大きな爪あとを残し、今も治山や砂防ダムが築造され着々と復旧と防災措置が図られています。文化財も特別史跡大野城跡を福岡県と太宰府市により復旧作業を行っています。

大石垣は山中を巡る城壁の一部で、大宰府政庁跡の北に位置します。二つの谷が合流する地点にあり、昭和48年の水害でも被災し福岡県が復旧をしていました。皆さんの印象にある大石垣はこの復旧石垣だと思えます。平成15年に壊れたものも昭和48年と同様の部分でしたが被害はさらに大きいものでした。谷部分はほとんどが崩壊し、どうしてよいか目の前は真っ暗になりましたが谷底と両側の山腹部分は残っていました。

復旧するにあたっては詳細な被害状況、石垣構造

の調査を行いました。その結果、石垣は谷部分で断面台形をしており、自立して谷を塞いでいたことがわかりました。底での幅が6m、最上部が4m程度、高さは6m以上ありました。石垣表面は面のある石が水平に並ぶような積み方をしました。現代では「イモ積み」と呼ばれ下手な積み方の代表とされますが、1300年余り残っていたのはそれなりの理由がありました。表面は「イモ積み」でも石垣内部で噛み合わせをしていました。つまり表面(二次元)で見ると下手ですが内部まで見ると三次元的に安定した構造となっていることがわかり、当時の人々の技術のすばらしさを感じずにはいられません。その他に要所にはたいへん重量のある石(5トン以上)を使ったり、石垣表面に対して奥に長く石を使う「胴こめ」といわれる手法を使用しています。また、岩盤に穴を穿ち石をはめ込んだりとさま

文化財課 城戸康利



この広報紙は、再生紙を使用しています。



# 太宰府の文化財

## 太宰府に残る大宰府

278



「太宰府に残る大宰府」。皆さんの身近に残る大宰府の名残について、お気づきの人も多いかもしれませんが、改めて日常に感じることのできる大宰府を紹介します。太宰府の由来となった「大宰府」は正式には「おおみこともちのつかさ」、いわば奈良時代に置かれた天皇の詔を国々に伝える西海道の「総括官庁」を指す役所名になります。この役所が置かれた場所が、現在のここ太宰府市を中心とした地域にあたり、役所ならびに役所に勤務する人々が住んだ地域（条坊）の二つに大きく分けることができます。また周囲には、「鎮護国家」のために奈良時代に建立された筑前国分寺・国分尼寺跡や、平安時代に菅原道真の墓所として建てられた天満

宮安楽寺（現在の太宰府天満宮）など、多くの文化財・文化遺産が残ることからも、「大宰府」を感じることはできます。今回紹介するのは、これら地上に残る文化財・文化遺産ではなく、地形に残る「大宰府」を紹介したいと思います。

常日頃歩いている道、秋には黄金色に染まる水田、隣近所を画する土地境界に実は、「大宰府」の痕跡が隠されています。奈良時代における官人居住域としての大宰府条坊の名残は、現在の通古賀・朱雀にみる東西南北の小道や、大佐野東部の水田地帯の東西南北畦畔に見ることができ、それはよく知られています。その他の「大宰府」はどうでしょうか。国分地区に残されている筑前国分寺や国分尼寺跡にも、実はその名残を見ることが

できます。一つは筑前国分寺や尼寺の寺域、いわばお寺の範囲を区画した施設の跡が、土地の境界や道路として残されています（写真▲印①②④）。また筑前国分寺と国分尼寺を結ぶ道路も、現在の国分共同利用施設が建つ敷地や隣の住宅の土地境界幅として見ることができ、ます（写真▲印③）。このように太宰府の中には、皆さんが日常的に歩いたり見たりしている風景に「埋没した大宰府」が多く存在し、太宰府における歴史の厚さを感じることができ、ます。しかし一方で、大規模な造成事業などによって、昔の地形が大きく変えられ、身近に残る「大宰府」が見えなくなっているのも時代の流れなのかもしれません。

文化財課 中島恒次郎



# 太宰府の文化財

279

## 特別史跡大野城跡 増長城南城門（仮称）

大野城は、7世紀中頃に築かれた朝鮮式山城で、もともと著名な古代山城の一つです。太宰府を見下ろす、標高410mの大城山（四王寺山）上に、総延長約8kmにわたって土塁が築かれ、その所々に城門が設けられています。

大野城の南・北には、土塁が内外二重に巡っていますが、南外周土塁の内側

には「馬賣」と呼ばれる東西に細長い平坦地があります。今回見つかった城門は、この平坦地の東端、土塁が「太宰府口城門」に向かって北東へ方向を変える地点付近に位置します。倉庫群の一つである増長天礎石群より南へ150mの地点にあることから、「増長城南城門」と仮称しています。



▲壁にみえる水平に並んだ石が、城門床石

平成15年7月19日未明にかけての豪雨は、大野城跡にも大きな被害をもたらしました。この場所でも土塁外側が大きく崩落しているのが確認されましたが、その後、未知の城門があることがわかり、平成19年度、発掘調査を行って被災状況を確認したうえで、現状保全と復旧工事を行うことになりました。

崩落した崖の法面を覆っていた表土をとると、砂と赤土とが美しく層をなした、高さ約6mの土塁が姿を現しました。

城門はこの中央で、ちょうど輪切りの状態で検出されました。土塁を切り通して作られており、新旧の2時期があるようです。古い城門については詳しくはわかりませんが、新しい時期の門は、壁は石垣で、床は石敷となっています。出土品に奈良時代の瓦が多いのは、奈良時代に修復されたことを物語るものでしょう。

その後の調査で、新しい時期の城門の床はほぼ全体が石敷で、また城内側には石階段が10段ほど設けられていることがわかりました。このように全面を石で構築し、しかも城内側に階段を設けた門は大野城跡では初めてです。

大野城が機能していた頃のことを記す文献史料は、現在知られているものでは、貞観18（876）年に太政官が出した文書が最後です。ただ、延喜5（905）年の「観世音寺資材帳」には、寺が所有する山の一つが観

世音寺北側の「大野城山」にあったことを記しています。ここには、この山地の北限は大野城南辺の遠賀門下道とあり、大野城に「遠賀門」という名の城門があったことを伝えています。

この「遠賀門」については、「太宰府口城門」とも想定されていますが、それよりさらに南側で、観世音寺のほぼ北の位置で城門が見つかったことで、今後再検討もなされると思います。歴史から姿を消していた城門ですが、再び姿を現したことで、私たちに大野城を再認識する手がかりを与えてくれそうです。

文化財課 井上信正





# 太宰府の文化財

280

## 天満宮参拝者の旅宿(松屋)

### 江戸時代後期

西鉄太宰府駅前から天満宮の参道へ曲がったすぐあたりを大町といいますが、このあたりは元々太宰府天満宮への参拝者が、旅の疲れを癒した旅宿が立ち並ぶ町でした。現在でも日田屋、大和屋、松屋、大野屋、泉屋などは建物が残っています。今回はその中の1つ、松屋について紹介します。

現在の松屋は三階建ての建物で、一階が土産物屋、お茶屋、二階、三階が住居として利用されています。「参道の町並みと民家保存整備」調査によると、この建物の建築年代は江戸時代後期までさかのぼる可能性が指摘されています。現在は三階建ての松屋ですが、江戸時代を通して二

階建てで、明治12〜13年にかけて三階部分を増築したことがわかっています。松屋は生業として江戸時代以来、旅籠と醤油屋を営んできました。幕末には薩摩藩の定宿として使われており、当時の当主である栗原孫兵衛の時代(安政5(1858)年)

には、幕府に追われる勤王派だった月照上人を匿い、薩摩藩に逃がすことに協力したほどでした。月照上人は薩摩まで逃げ延びましたが、薩摩藩体制の急激な変化をうけて、西郷隆盛と錦江湾で入水し亡くなられました。松屋と月照上人との結びつきは、月照上人が住職を務めていた京都清水寺と松屋の繋がりとという形で、現在も

なお続いています。松屋の中庭には月照上人の歌碑が建立されており、随時見学することができます。後に松屋孫兵衛は藩から月照上人を匿ったことについて嫌疑を受け、慶応元(1865)年に行われた福岡藩の勤王党弾圧、通称「乙丑の獄」によって投獄されてしまいました。(その後、孫兵衛は保釈され、明治時代になると叙勲を受けるなど、名誉回復します)

松屋は昭和9年に旅館を廃業した後は、太宰府物産組合事務所として利用され、米軍に買取、普通の貸し家等と、利用形態が変遷していき、それに伴い建物は一時荒廃しました。しかし50年前から営業再開したのち、建物を修復する努力を継続し、門前町を象徴する建物のひとつとなっています。

文化財課 高橋 学

